



啓明学院中学校

Hands and hearts are trained to serve
both man below and God above.

2025年度 入学試験問題 A方式【国 語】

[試験時間50分/100点満点]

- ※ 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- ※ 句読点はすべて字数にふくみます。

受 験 番 号

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

春になり、私、沙良と双子の妹の衣生は啓明学院中学校に入学した。クラスは私がAクラス、衣生はCクラス。小学校は人数が少なく、付き合う友だちもほとんど同じで、私と衣生はいつも一緒にいた。しかし、中学校は人数が多く、ほとんどが知らない子ばかりだった。そんな中で、私は入学当初からいろんな子にどんな声をかけ、友だちもたくさんできた。だけど、妹の衣生は引つ込み思案で、私はそんな衣生のことを心配していた。部活動も、私は迷わずあこがれていたチアリーディング部に入ったが、衣生はまだどの部に入るかも決めていないようだ。

チアリーディング部では、毎日きびしい練習があった。私は次第にステップが（一）【一】についてきたが、部員の中には振りつけを覚えるのもやつとという様子の子もいた。そんな子を励ましているうちに、いつの間にか一年生のまとめ役のようになっていった。

そうこうしているうちに、衣生とはそれぞれ全く違う生活になってしまった。クラスも離れているし、友だちも全く違う。私は毎朝自主練習をし、放課後の部活動も終わるのが遅いので、登下校も別になった。学校で見かける衣生は、いつも図書室で本を読んでいる。たまに友だちといても、にぎやかに話す様子は見られない。私は心配になって、もつとクラスメイトに話しかけなよ、とか、本ばかり読んでたら友だちできないよ、と言ったら、衣生はだまっとうつむいただけだった。

夏休みになった。私は大会に向け、毎日朝から夕方まで部活漬けで忙しかった。

ある日、部室に向かっていると、衣生の姿を見かけた。夏休みなのになぜ衣生が学校に来ているのだろう、と不思議に思っ話しかけようと後を追うと、衣生は高校生の先輩と何やら話しながら図書室に入っていた。そこでは、中学生や高校生の男女数人と、一人の先生が話合っていた。そばには「数理科学研究部」と書かれたホワイトボードがあり、その下には見知らぬ難解な数式が並んでいた。思わず私はしりごみをした。

数理科学研究部？

「君も数学に興味があるのかい？」

先生が私に話しかけると、そこにいる全員がこちらに注目した。

「あ、沙良……何してるの？」

衣生が不思議そうに聞いてきた。

「ここに衣生が入ってくるのが見えたから……何してるんだろうと思って……」

後をつけてしまったうしろめたさもあり、私は「A」してしまった。

「①私、最近入部したのよ。今は新しい理論についての研究のために、夏休みもわりと学校に来てるよ。」

「知らなかった……え、でも衣生^{いぶ}って数学得意じゃなかったよね。成績だつて私より悪いし……」

すると、先生がこう言った。

「数理科学研究部の部員はね、必ずしも数学が得意でなくてもいいんだよ。ここにいる上級生たちも、実は数学が苦手だという人間はたくさんいるからね。数学が苦手でも、探究心さえあれば、専門家にも(Ⅱ)【をとらない】新たな理論の発見はできるよ。君もどうだい？」

「いえ、私はチアリーディング部なんで……失礼します！」

そう言つて逃^にげるように立ち去った。

夕方遅く家に帰ると、衣生^{いぶ}はリビングで数学の宿題をしていた。頭を抱^{かか}えながら問題を解いている。

「ねえ、なんで数理科学研究部なの？ ついて行けなくなっちゃうんじゃない？」

衣生^{いぶ}は答えなかった。うつむくように数学の問題を見ている。そのまま私は続けた。

「衣生^{いぶ}には無理。やめときなよ。やつぱり私と一緒^{いっしょ}にチアリーディングをするのが一番……」

言い終える前に、バンツと机を叩^{たた}く音がした。衣生^{いぶ}が「B」身をふるわせ立ち上がった。

「もう、うるさいなあ！ 沙良^{さら}には関係ないでしょ！ どうして私が数理科学研究部に入っちゃいけないの？ 何がだめなの？」

「別にだめなんて言つてないけど……ただ私は……」

「沙良^{さら}はいつまでも私がついてくると思ってるんじゃないの？」

そう言つて、衣生^{いぶ}は自分の部屋に入つていった。

あんな衣生^{いぶ}は初めてだった。私の後ろについて、私の言う通りにしてきたのに……。

②私はショックで呆然^{ぼうぜん}としてしまった。その日は結局、衣生^{いぶ}と一言も話さなかった。

翌朝、私は早く起きて部活動に行ったため、衣生^{いぶ}とは顔を合わせなかった。昨日のことが頭を離^{はな}れず、練習も(Ⅲ)【の空】だった。部活動の後、気になつて図書室をのぞいて見ると、衣生^{いぶ}は昨日見た数理科学研究部の先輩^{せんぱい}と楽しそうに話をしている、それが【C】私の心を沈^{しず}ませた。私は黙^{だま}つて図書室を後にし、重い足取りで練習に戻^{もど}つた。

それからは振りつけがまったく頭に入つてこなくなつた。

「今日はどうしたの？ 顔色も良くないし。今日は大事をとつて帰りなさい。無理をして怪我^{けが}でもしたら大変よ。」

顧問の先生に促され、普段であれば続けさせてくださいと言うところだが、③こんな状態では迷惑をかけてしまうと思い、あいさつも【D】にその場をあとにした。

いつもよりずいぶん早く家につくと、お母さんが夕食の準備をしていた。

「おかえりなさい、衣生……あれ、沙良？ あなたが衣生より早く帰ってくるなんて珍しいわねえ。」

確かに。私が帰ってくる頃には衣生はいつも家にいて、「おかえり」と声をかけてくれた。昨日から口を聞いていないが、帰ってきたら衣生におかえりって言ってみよう。いつも衣生がそうしてくれていたみたいに。

中学生になって部活動が始まってから、忙しくてお母さんの手伝いなんてできていなかったが、今日はなんとなくお母さんの側にいたくて、一緒にカレーを作った。

「沙良が手伝ってくれるなんて久しぶりね。いつも衣生が手伝ってくれていたけど、遅くなる日が増えたから。最近はお母さん一人で飯作ることがとても多くなったわ。」

「……お母さん、衣生が数理科学研究部に入ったことどう思う？ チアリーディング部に入ったらよかったと思わない？」

私は④自分でもわからないかもやめた気持ちを感じながら言った。お母さんは、⑤「」な顔をした後、こう言った。

「何を言っているのよ。私は、衣生が数理科学研究部に入って、とてもうれしいわ。衣生が自分で何かをしようって決めて、初めて沙良と違うことにチャレンジしたのよ。小さい頃から衣生はいつも沙良と一緒にいて、沙良の後をについていたでしょう。衣生は自分からみんなの輪の中に入れるタイプではなかったから、中学生になってからが心配だったのよ。でも、ああやって自分一人で決意して挑戦しているのよ。」

お母さんは、ふと真剣な表情になり【E】私を見てこう続けた。

「あのね、沙良。あなたたちは一緒に生まれて、これまで何をするにもずっと一緒だった。でもね、沙良は沙良。衣生は衣生なの。それぞれの道があるから、何もかもずっと一緒というわけにはいかないの。これから大人になっていく中で、進路だったり、仕事だったり、自分に合う道をそれぞれに選んでいくの。それぞれにね。中学校っていうのはね、社会に出る第一歩でもあるの。衣生はその第一歩を踏み出そうとしているのね。」

私は、衣生がひとり立ちすることがさびしかったんだということによく気がついた。

「社会に出る第一歩……」

「だから、沙良もちゃんと自分に目を向けないとね。」

そう言いながら、お母さんは私の頭をぽんぽんとやさしくたたいた。

自分に目を向ける……。そうだ、今日はダンスのステップが全然できていなかった。

「お母さん！ もうカレーは煮込むだけだね？ 私、練習する！」

リビングで今日教えてもらったステップを一生懸命思い出して練習していると、玄関のドアが開く音がした。

「お母さん、ただいま……あれ、沙良？」

私の顔を見て、衣生の顔が強ばったのがわかったので少し⑥ためらったが、勇気を出して大きな声でこう言った。

「おかえり、衣生！」

「た、ただいま……」

衣生は私の目を見ずに、うつむきながらそう言った。私は続けた。

「今日はね、私が手伝ってカレーを作ったんだよ。絶対おいしいんだから！ 早く手を洗って、一緒に食べよう！」

と言いながら、衣生の背中を押して洗面台に連れて行こうとすると、衣生は私の方を振り返し、

「大丈夫？」

と心配そうに聞いてきた。どうやら、帰り道でチャリーディング部の友だちに会い、私が部活動の途中で帰ったことを聞いたらしい。

「大丈夫、大丈夫。もうすっかり元気になったよ！」

私は胸を叩きながら、そう答えた。

「それならいいんだけど……沙良が部活動を早退するなんて、今までなかったと思って。沙良はいつも元気でも出来て、私はずっとそんな沙良に支えられてきたから……」

私は今までずっと⑦そうありたいと思っていた。でも……。

「そんなことないよ。いつも一緒に、何でも話せる衣生がいてくれたから、私はがんばってこられた。支えられてきたのは私の方だよ。本当はさびしかったんだ。私の知らない衣生になっちゃみたいで……。でも、衣生は衣生だもんね。今までごめんね。」

衣生はじっと私を見つめ、そしてこう言った。

「私こそ、ごめん。本当は私、ずっと不安だった……。中学生になってから、クラスや部活動や、友だちとか、色々違うことが多くなって、それで気づいたの。」

私に目を向けつつ、衣生は続けた。

「このままじゃだめだって思った。私だって沙良みたいに、ちゃんと一人でチャレンジできるようにしたいって。だから、私、⑧心」

――【】―― 数理学部に入ることになった。一度決めたことは最後までやり切りたい。私がそう決心できたのは、沙良のおかげだよ。」

私は目頭^{めがしら}があつくなるのを感じながら応えた。

「よし、衣生^{いぶ}はしっかりがんばって、大きな学会で発表しちゃうぐらいの研究成果を出してもらわないとね！ 私もチアの全国大会優勝を目指してがんばるから！」

そう言いながら、私と衣生^{いぶ}は満面^{えがお}の笑顔でハイタッチをした。

「沙良^{さら}、衣生^{いぶ}、ご飯よー！」

お母さんがダイニングから私たちを呼ぶ声が聞こえる。

「はーい！ 今行くー！」

二人の返事がぴつたりと重なった。

問一 ―線部(I) (III) の「」にひらがな二字を入れ、それぞれ慣用表現を完成させなさい。

問二 「A」 「E」に入る最も適切な言葉を次のア～キの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア おちおち イ こつこつ ウ そこそこ エ たじたじ オ まじまじ カ わなわな キ ますます

問三 ―線部①「私、最近入部したのよ」について、衣生いぶが入部したのはどのような思いからですか。解答らんらんに合うように、本文中から十八字でぬき出して答えなさい。

問四 ―線部②「私はショックで呆然ぼぜんとしてしまった」のはなぜですか。解答らんらんに合うように答えなさい。

問五 ―線部③「こんな状態」とはどのような状態ですか。解答らんらんに合うように、本文中から二十字でぬき出して答えなさい。

問六 ―線部④「自分でもわからないもやもやした気持ちを感じ」について、沙良さらがこのような気持ちを感じていたのはなぜですか。解答らんらんに合うように、本文中から十九字でぬき出して答えなさい。

問七 ―線部⑤「」な顔」に入る最も適切な言葉を次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア えびでたいを釣つったよう イ はちの巣をつついたよう ウ 飼かい犬に手をかまれたよう
エ とびがたかを生なんだよう オ はとが豆鉄砲まめてっぽうを食くったよう

問八 ―線部⑥「ためらった」と同じ意味を表す表現を、本文中から七字でぬき出して答えなさい。

問九 ―線部⑦「そうありたい」とは、どのような願いですか。解答らんらんに合うように答えなさい。

問十 ――線部⑧「心【一】【一】」が四字熟語として成立するように、【一】にそれぞれ漢字一字を入れなさい。

問十一 本文の内容と合っているものを次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 沙良は、衣生が数理科学研究所に入学したことを、快く思っていなかった。
イ 衣生と沙良は、一緒にチアリーディング部に入ろうと約束していた。
ウ 沙良は、お母さんの言葉によって、自分の気持ちを理解することができた。
エ 衣生は、沙良のすすめによって、数理科学研究所でがんばろうと決意した。
オ 衣生は、沙良に対して、ずっと好ましくない気持ちばかりを持っていた。

問十二 ――線部「一度決めたことは最後までやり切りたい」について、あなたは一度決めたことを最後までやり切れることは大切だと思いますか。

ア 大切だと思う イ 大切だと思わない ウ どちらとも言えない
の中から一つ選び、記号を答えなさい。そして、そのように考えた理由を、五十字以内で答えなさい。

二 次の①～⑩の――線部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

① 予定をエンキする ② まきをワる ③ 同じケイレツの企業 ④ 布をソめる ⑤ シンコクな顔つき

⑥ オサナいころの思い出 ⑦ 大統領にシュウニンする ⑧ 車がコショウする ⑨ ウチュウ飛行士を目指す ⑩ 人口がゲキゲンする

